

Macmillan's *Cranford Series*の誕生

ヴィクトリア朝末期の挿絵本出版事情

小泉朝子



'A magnificent family red silk umbrella.'

*Cranford Series*とは、1890年代の第二次挿絵本ブームに乗って、Macmillan社から出版された、挿絵付き文学シリーズの総称である。1890年に大好評を博したOliver Goldsmithの*Vicar of Wakefield*を皮切りに、翌1891年にはMrs Gaskellの*Cranford*、92年にはRichard SteeleとJoseph Addisonが十八世紀の田舎紳士を描いた*Days with Sir Roger de Coverley*、93年にはMiss Mitfordの*Our Village*、Austrian Tristram著の*Coaching Days and Coaching Ways*と続く。*Vicar of*

*Wakefield*は、90年12月に発売されると、ひと月もたたないうちに5,300部を売り上げる、という快挙を成し遂げている。¹ 全タイトルが11月または12月に出版され、クリスマス商戦の目玉商品となった。94年以降も出版時期は変わらず、グリム兄弟の *Household Stories* や、Thomas Hoodの *Humorous Poems*、Washington Irvingの *Rip Van Winkle* や *Old Christmas*、*Bracebridge Hall* といった作品がクリスマスをにらんだ時期に出版され、作品総数は1901年の時点で十六に及んでいる。² このシリーズの成功はどのような社会背景を映し出しているのだろうか。シリーズの性質、1890年代当時の出版界の動向、メディアにおける受容を通して分析したい。

シリーズ名は最初から決まっていたわけではない。シリーズの第一作も *Cranford* ではなく *Vicar of Wakefield* であるし、*Cranford* 自体はシリーズ第二弾だった。*Cranford Series* と銘打たれたのは1893年で、シリーズ名を全面に出した宣伝攻略が繰り広げられるのも、これ以降である。シリーズ化を決定づけた初期の五作品すべてに共通するのは、当時の読者にノスタルジーを感じさせる題材を扱っているという点である。*Vicar of Wakefield* はもとより、*Days with Sir Roger de Coverley* も、もとはSteeleとAddisonが *Spectator* 誌に掲載した文章を、Macmillanが挿絵つきで転載したものだ。また、Austram Tristramの *Coaching Days and Coaching Ways* は、1880年代の道路ブームに乗じて登場した作品であり、蒸気エンジンの普及によって鉄道利用が一般市民にも完全に浸透した80年代に、あえて一昔前の馬車道をたどって昔の生活を懐かしみつつ、各地の観光スポットを案内するという、ガイドブック的な作品だ。Mrs Gaskellの *Cranford*、Miss Mitfordの *Our Villages* についても、作品の時代設定はともかく、昔風のおいがただよう作風、という共通項がある。

シリーズに共通の形態は、百前後のチャーミングな挿絵が添えられた八折版で、装丁は流麗な金メッキ細工の表紙、背表紙に加え、背表紙以外の三方小口にも金メッキが施されている。値段は通常のクロス版で6シリング、豪華版では30シリングに設定されており、値は張るものの、高嶺の花ではなく、一般市民にも手が届く範囲だった。挿絵付き、という要素が、このシリーズを成功に導いた。シリーズに挿絵を提供し、シリーズ名にちなんで *Cranford School* と呼ばれる挿絵画

家たちの中には、現在、忘れられている画家も数人いる。*Vicar of Wakefield*から*Coaching Days and Coaching Ways*まで、初期の五作品の挿絵を担当し、その後もシリーズの主要作品を手がけてCranford Schoolの中心的存在となったHugh Thomson (1860-1920)も、再発掘が必要な人物である。1880年代に出版界にデビューした彼は、この*Cranford Series*でMacmillan社の稼ぎ頭となり、他社ではJane Austenの*Pride and Prejudice*の挿絵を手がけて英米で大ヒットを飛ばし、第一次大戦開戦まで第一線で活躍した売れっ子の挿絵画家である。³ Thomsonの他には、ヴィクトリア朝後期の代表的挿絵画家、Randolph Caldecott (1846-86) や、二十世紀に児童文学の挿絵画家としても名を上げたC. E. Brock (1870-1938)、W. H. Brock (1875-1960) のブロック兄弟がいる。シリーズの成功について、Macmillanの社史が割くスペースはわずかだが、このシリーズの成功が当時の出版業界において、いかに重要な位置を占めていたかは、他の出版社の動向に目を向けると、より明白となる。⁴ Kegan Paul社からは1895年に文筆家Austin Dobsonの詩集が*Cranford Series*を模した装丁で、挿絵付きで出版されており、George Allen社では前述のJane Austenの*Pride and Prejudice*が1894年に出されている。他にも、Service and Patron社からは*Illustrated English Library*シリーズ、Bliss Sand社からは*Illustrated Standard Novels*シリーズが参戦、90年代に挿絵本シリーズの隆盛期を形成した。二十世紀に入ってから、Dent社が*Illustrated Essay Series*を出してMacmillanに追随する。各社とも、シリーズの形態や作品選択は明らかに*Cranford Series*を手本にしていた。本家Macmillanの動きも活発で、作品のラインナップにほとんど変わりはないものの、*Cranford Series*から*New Cranford Series*へと名称を変更したり、廉価版の出版や、さらにはGeorge Allenに先を越された*Pride and Prejudice*を除いたオースティンの五作品を加えて、*Macmillan's Illustrated Standard Novels*と名づけたシリーズも発表している。また、出版界の動きではないが、*Cranford Series*に収められている*Coaching Days and Coaching Ways*には、Hugh Thomsonの挿絵が大好評を博した結果、その挿絵を写した食器類が販売され、実に良く売れた、というエピソードがある。*Cranford Series*の影響は多方面に及んでいた。

シリーズに対する書評は、おおむね好意的である。*Vicar of Wakefield*には、

1890年12月の*Times*、*Pall Mall Gazette*が書評を掲載している。

We cannot conclude without mentioning an attractive reprint of an old favourite, *The Vicar of Wakefield*, with a preface by Austin Dobson, and illustrations by Hugh Thomson, sufficiently recommended by the congenial pencil of the artist and the congenial pen of the author of the preface.⁵

Mr. Thomson shows infinite invention and variety in the two hundred drawings — some of them decorative head and tail pieces, but most of them illustrations to the text — scattered through the volume.⁶

また、1891年12月の*Pall Mall Gazette*には、*Cranford*を絶賛した書評が載っている。

One is almost tempted to think, as one turns over the pages of this delightful edition, that Mrs. Gaskell must have written *Cranford* [*sic*] with a prophetic eye for Mr. Hugh Thomson as an illustrator. All the characters in the little village society gain by Mr. Thomson's sympathetic delineation.⁷

名作が、挿絵本という新たな形態で登場したことを歓迎する論調が圧倒的だった。

*Cranford Series*がすんなり受容された要因は、シリーズに収められた作品群の傾向と、出版当時の社会的背景にある。1880年代、90年代を振り返る出版業界の回想録では、この時期と1850年代、60年代の第一次挿絵本ブーム期とを比較し、80年代、90年代を“respectability”にこだわらない風潮が現れてきた時期と位置づけている。*Sylvia's Home Journal*や*Windsor Magazine*の発行元であるWard and Lock社の百年史にも“respectability”に関する記述がある。

On the whole, English life was becoming less prim and proper, and was

dropping the outward morality and smug respectability of an earlier generation. People were also beginning to travel greater distances, exploring their own countryside and, in the case of the wealthier classes, the European continent.⁸

一世代前とは異質な時代に移行している、との自覚は、当時の一般的なイングランド人も持っていた。雑誌記事のタイトルにもその意識が反映される。*Nineteenth-Century*誌には、“Is life worth living?”、“Insanity and crime”といった不穏な空気を反映した記事が1880年代に多く掲載されているし、他誌でも同様の記事がこの時期、多くなる。⁹ 前の世代と現代の断絶を論じた代表的な記事に、*Temple Bar*誌で1892年に掲載された“Creatures of Transition”がある。

Towards the old generation we are far from feeling contempt. Rather do we admire it for its vitality, its high spirits, its enjoyment of things that we are unable to enjoy. We do not pride ourselves that we are superior to it. We only marvel that we are so very, very different. It is more than the ordinary difference between two successive generations. We feel cut off from it and isolated. With its beliefs, its hopes, its pleasures, its ideas, we have nothing in common. ... And we have scarcely anything of our own.¹⁰

現代人の辛さを嘆く記事と平行する形で、一世代前、さらに遡って十八世紀といった一昔前の時代を懐古的に振り返る動きも顕著だった。この“18th century revivalism”「十八世紀復興運動」と呼ばれる運動の牽引役を担ったのが、ほかならぬMacmillan社である。同社の看板雑誌で、1859年から続く総合雑誌*Macmillan's Magazine*には、文学記事が多く掲載されているが、これに加えて1883年に挿絵入りの雑誌が新たに創刊される。*English Illustrated Magazine*と名付けられたこの月刊誌には、創刊当初から懐古的な記事が圧倒的に多かったうえに、すべての記事が挿絵付きだった。¹¹ 目次には、「パースの二世紀」「昔の歴史的な建造物」「昔のロンドンの宿屋」「昔の村の暮らし」といったタイトルが数多く並び、“old”、“bygone age”という単語がタイトルに入らない月は皆無である

事実から、強い懐古傾向は明白である。そして、この雑誌に創刊時から七年間携わった挿絵画家が、後に同社の*Cranford Series*で立役者となるHugh Thomsonだった。

懐古趣味が見受けられるのは、この*English Illustrated Magazine*だけではない。程度の差こそあれ、当時、流通していた雑誌には、昔を懐かしむ記事が頻繁に掲載されている。Lynn Lintonが*Nineteenth Century*誌に寄せた記事、“A Picture of the Past”もその一例だ。ユーモア漂う文章の中で、リントン夫人は様々な話題にふれる。十八世紀の女性は、家庭に縛られることは多かったが、現代女性のようにアフリカ探検の旅に出ることも、参政権を主張することもなく、家庭の切り盛りは実に見事だった。ひと昔前までは、半年に一度の大掃除を女性を取りしきっていたので、現代人を苦しめている憎きゴキブリも赤アリもいなかった、と熱弁をふるっている。さらに、昔と今の違いについて、夫人は文学を引き合いに出しつつ、こう書いている。

This is not saying that the literature of the last century and ante was not coarse than ours. It was — infinitely, and, to us, almost inconceivably coarse. But it had not the maleficent moral influence that is to be found in Ibsen and certain others. It spoke broadly of things as they were — openly of things natural, in a straightforward, farmyard kind of way; but it had no seductive sliminess, no artful suggestiveness about the sweetness of things sinful in themselves.... Now the whole spirit as well as the characteristic of those past times remains with us. Good and bad together have been swept into the great abyss, and in both our improvement and deterioration we are equidistant from the starting-point we have considered.¹²

十八世紀の簡素な生活ぶりが、十九世紀末の重苦しい雰囲気と対照的に記されている。注目すべきは、リントン夫人が文中で言及している「十八世紀の暮らしぶり」が、ギaskell夫人の*Cranford*に登場するご婦人方の生活と共通項が多いという点だ。誰かの家を訪問したり、訪問を受けたり、カードに夢中になったり、

女主人と女中が協力しあい、信頼しあう関係を築いていたり、とMiss MattyやMartha、Mrs Forester、Miss Poleを髣髴とさせる記述が多々見受けられる。とはいえ、この記事に*Cranford*の文字が出てくることはない。

Jane Austenの全集が飛ぶように売れたという事実も、十八世紀復興ブームの浸透をうかがわせる。オースティンの死後六十年近くは、不完全な形で全集が約二十年周期で出版されていただけだったが、この状況は1880年代に入ると一変する。1882年にBentley社からデラックス版のオースティン全集が出版されたことを皮切りに、翌83年にはRoutledge社から廉価版の全集が登場、86年以降もRoutledgeから新装版でオースティン作品が出版されている。Dent社からは1892年に全集が出版され、五年のうちに五回、版を重ねる売れ行きを見せる。大好評の背景に、作品への再評価があったことは確かだ。また、「オースティン・マニア」を意味する単語、“Austenite”や“Janeite”の誕生時期と、十八世紀復興ブームとが無関係であるとは考えにくい。*OED Supplement*によると、この二単語の初出は1896年とされているが、実際には、1890年の*Spectator*誌上ですでに両単語とも使用されている。¹³ Macmillanの*Cranford Series*が、こうした流れを意識した上で刊行されたことは、容易に推測できる。

では、この十八世紀復興ブームに乗じて登場したシリーズのタイトルが、*Cranford*という、ヴィクトリア朝中期の繁栄が見え隠れする作品からとられたのは、なぜだろうか。一単語のみの作品名が他になかったから、という単純な理由も考えられないわけではない。シリーズ名の由来については、Macmillanの社史に言及がないため、推測の域を出ないが、*Cranford*という作品の舞台と登場人物が鍵となっていることは間違いない。舞台は田舎町のクランフォードだが、物語の進行役を勤めるのは、大都市マンチェスターがモデルの架空都市ドラムブル在住の若い女性、Mary Smithだ。どこにでもいそうな、実に普遍的な名前のこの女性は、十八世紀にタイムスリップしたかのようなクランフォードの町に、十九世紀半ばの空気を送り込む。また、Captain Brownが列車に轢かれて死ぬというエピソードからも、*Cranford*の時代設定がヴィクトリア朝期であることは明確に示されおり、“Captain Brown is killed by them nasty cruel railroads!”というJessyの台詞は、十八世紀の雰囲気を残したクランフォードと現実との対照

を、効果的に映し出す。¹⁴ シリーズに収められた作品群を見渡すと、当時の現実社会を描写した唯一の作品がこの *Cranford* であることに気づく。 *Cranford Series* 版の *Cranford* で序文を担当した Anne Thackeray Ritchie もその点に触れ、作者が厳しい現実をしっかり見据えていることを読者が知っているからこそ、この作品は感銘を与えるのだと書いている。

It was because she [Mrs. Gaskell] had written *Mary Barton* that some deeper echoes reach us in *Cranford* than are to be found in any of Jane Austen's books, delightful as they are.¹⁵

懐古の対象である十八世紀と、読者が生きている現実の十九世紀、この二つを結びつける役割を *Cranford* という作品が果たしているからこそ、シリーズ名になったとは考えられないだろうか。

ギaskell夫人への追悼記事のうち、*Macmillan's Magazine* 誌が掲載した記事は、*Cranford Series* が成功した理由を分析する上で、興味深い内容だ。

It is not a slight matter that an author can look back at the last glimpse of life, and feel that he has left behind him no written word which can make those who read it otherwise than better; and this acknowledgement is justly due to Mrs. Gaskell. Other novelists have written books as clever, and many have written books as innocent; but there are few, indeed, who have written works which grown-up men read with delight, and children might read without injury.¹⁶

大人と子供が楽しく読めて、しかも無害　すなわち、露骨な性的ニュアンスを含まない、という特徴が、*Cranford Series* の一貫したイメージになっていることが読み取れる。性的な描写がない、とは言い難い箇所も多々あるのだが、ユーモアで品良く処理されればお咎めなしらしい。シリーズ第一作目となる *Vicar of Wakefield* の書評にも、Anne Thackeray と同じ趣旨がうかがえる。 *Speaker* 誌で

は、“an old friend in the daintiest of new attires”と評され、ガラスケースの書棚ではなく、お気に入りの本が並ぶ炉辺の書棚に並べて、家族団欒の際に読んで楽しんだり、客間のテーブルに置いて誰もが読めるようにしたりすべきだ、と置き場所まで指定されている。¹⁷ 事実、*Cranford*に添えられたHugh Thomsonの手になる九〇余枚の挿絵は、微笑ましい場面を描いたものがほとんどだ。“A magnificent family red silk umbrella”(Ch.1)、“To see the Alderney”(Ch.1)、泥棒予防の警備団を描いた“A regular expedition”(Ch.10)など、読者の笑いを誘う挿絵が圧倒的である。例外は二枚だけある。一つは、Miss Mattyの弟、Peterが父親に冷たい視線を投げかけている、“Have you done enough, sir?”(Ch.6)、もう一枚は、破産したMiss Mattyが会計簿をにらんでいる“The account-books”(Ch.13)である。作中の深刻な場面には極力挿絵をつけない、という画風が*Cranford Series*の全作品に通じる特徴であることを考えれば、このシリーズが、憂鬱な現実社会をいっとき忘れるための媒体になっていたことも、容易に想像できる。

1890年代は、唯美主義、自然主義という文学の流れに加えて、美術界でもAubrey BeardsleyやWilliam Morrisの活躍があり、アールヌーボーの影響を色濃く受けた流派の活動も盛んだった時期である。様々な流れがある中で、十八世紀復興ブームに出版界が応じた結果、より庶民的な*Cranford Series*が誕生し、一般に広く受容された。今では忘れ去られたこのシリーズを発掘し、分析することによって、ヴィクトリア朝文化の一部を理解し、追体験することも可能だろう。少なくとも、*Cranford*という作品が担った役割の幅広さを再認識させてくれるシリーズであることは、間違いない。

* この論文は、2002年10月6日、日本ギヤスケル協会第14回大会において発表した「Macmillan's *Cranford Series*の誕生」に加筆、修正を加えたものである。

注

1. *The Vicar of Wakefield*は、1890年12月2日の発売後、22日にはクロス版の5000部、デラックス版の300部が売り切れた。翌年2月までに、さらに1300部が売れている。
M. H. Spielmann and Walter Jerrold, *Hugh Thomson: His Art, His Letters, His*

Humour and His Charm (London: A. & C. Black, 1931), pp.57-58. なお、シリーズ三作目の*Days with Sir Roger de Coverley*は、1886年に一度、同Macmillanから出版されたものを、再収録したものだ。*Days with Sir Roger de Coverley*, illust. by Hugh Thomson (London: Macmillan, 1886)

2. James Lane Allen, *A Kentucky Cardinal and Aftermath* (London: Macmillan, 1901) 巻末の広告から。
3. Jane Austen, *Pride and Prejudice*, illust. by Hugh Thomson (London: George Allen, 1894). 一年間での販売冊数は、11,605冊にのぼり、1907年までに25,000冊が売れている。Hugh Thomson, p.91; Percy Muir, *English Children's Books 1600-1900* (London: B.T. Batsford, 1979[1954]), p. 189. また、*Cranford Series*の*Vicar of Wakefield*では、全面を使った挿絵一枚につき五ポンド、半面の挿絵には三ポンド、テイルピースには二ポンド、という契約が、ThomsonとMacmillanの間で交わされていた。British Library, Additional MSS 55231, no. 120.
4. Charles Morgan, *The House of Macmillan 1843-1943* (New York: Macmillan, 1944) pp.189-190.
5. *Times*, December 10, 1890.
6. *Pall Mall Gazette*, December 17, 1890.
7. *Pall Mall Gazette*, November 28, 1891.
8. Edward G. D. Liveing, *Adventure in Publishing: The House of Ward Lock 1854-1954* (London: Ward Lock, 1954) p.65.
9. W. H. Mallock, "Is life worth living? Part 1", *Nineteenth Century*, Vol.2(1877), pp.251-273.; —, "Is life worth living? Part 2", *ibid.*, Vol.3(1878), pp.146-168; G.. W. W. Bramwell, "Insanity and crime", *Nineteenth Century*, Vol.18(1885), pp.893-899.
10. "Creatures of Transition" *Temple Bar*, Vol.96(1892), pp.389-395.
11. Simon Houfe, *Fin de Siecle* (London: Barrie and Jenkins, 1992) pp.161-164.
12. E. Lynn Linton, "A Picture of the Past" *Nineteenth Century*, Vol.32(1892), pp.791-803.
13. "The Charm of Miss Austen" *Spectator*, Vol.64(1890), pp.403-404.
14. Elizabeth Gaskell, *Cranford* (Oxford: Oxford University Press, 1998), p.16.
15. Anne Thackeray Ritchie, "Preface to *Cranford*", *Cranford* (London: Macmillan, 1892) p.xix.
16. "Mrs. Gaskell", *Macmillan's Magazine*, Vol.13(1865), pp.153-156.



'To see the Alderney.'

17. *A Kentucky Cardinal and Aftermath* 巻末の広告から。

